

---

# バカとテストと召還獣 文月学園試召戦争黙示録

柴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召還獣 文月学園試召戦争黙示録

### 【Nコード】

N8538W

### 【作者名】

柴

### 【あらすじ】

バカテストその他のクロスオーバーです。

基本原作道りに行き、所々にいるんな作品のネタや話を折りまぜていこうと思っています。

駄文なと思いますが、よろしく願います！

## プロローグ

ここ文月学園は世界初の特殊なシステムを導入した新学校である。

「では、はじめてください。」

その一つは試験召還戦争、最先端技術で実現された召還獣によるクラス間戦争である。

そしてもう一つは成績累進式の教室設備、一年の終わりに振り分け試験を行い、その成績によって上のAクラスから下のFクラス六段階のクラス分けがされる。

明久 side

(これが振り分け試験か・・・さすがに難しいけど。これならいける！)

「・・・はあ はあ」ガタン

それは、鉛筆を走らせる音、時計の秒針が刻む音、重く息苦しいプレッシャーが広がる教室に突然響いた。

姫路さんが椅子から滑り落ちるようにして床に倒れた。

「姫路さんッ！」

僕はすぐに倒れた姫路さんをだきおこした

「大丈夫姫路さん、しっかりして!!--」

僕と姫路さんの前に試験管を務めていた、教師がやってきて

「試験途中での退席は『無得点』扱いとなるが、それでいいかね？」  
と非情なことを言ってきた。

「ちょ ちよつと先生、具合が悪くなって退出するだけで、それは酷いじゃないですか！」

僕は教師に抗議した。

しかし、そんな僕をスルーするかのようには姫路さんは、

「は・・・はい」

と言って退出していった。

## 題一問 クラス分け発表（前書き）

### 第1問

問 以下の問に答えなさい。

「調理の為に火をかける鍋を作成する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。」

姫路瑞希、フェルト・グレイス、高町なのはの答え

「問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。」

合金の例・・・ジュラルミン」

教師コメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っかけ問題なのですが、3人は引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点・・・ガス代を払っていなかったこと」

教師コメント

そこは問題じゃありません。

平沢唯の答え

「問題点・・・火が強すぎたこと」

教師コメント

そこも問題じゃありません。

吉井明久の答え

「合金の例・・・未来合金（すごく強い）」

教師コメント

すごく強いと言われても。

刹那・F・セイエイの答え

「合金の例・・・ガンダリウム合金」

教師のコメント

まさしく未来合金ですね。

上条当麻、土御門元春の答え

「合金の例・・・黄金練成」

教師コメント

先生も黄金練成を使用できればと思っています。

## 題一問 クラス分け発表

ルルーシユ side

7時50分

「今日から新学期ですねお兄様。」

「ああ、そうだなナナリー。」

俺は朝食をいつしよに食べていたナナリーと今日から始まる学校のこと話していた。

「ナナリーも今日からからこの学園に入るんだ、しっかり勉強するんだぞ。」

「はい、お兄様。」

コン コン

「ルルーシユ、いる〜?」

するとノックと共に俺を呼ぶ声が聞こえた。

「はい、今開けます。……どうしたのですか先輩こんな時間にそれにライを連れて。」  
扉を開けると学校の先輩のミレイ・アツシユフォードとライが立っていた。

ライは半年前、このクラブハウスの裏庭で倒れていた所を俺とミレイ先輩が見つけたの、目を覚ましたら、自分の名前以外まったく覚えていないという状態だった。そして先輩のご好意というか気まぐれみたいな具合にこのクラブハウスで寝起きしている。

何故先輩にそんなことが出来るかという。先輩の曾祖父が文月学園を作るときに多額の援助をしたからで、その孫娘の先輩にはある

程度の自由が許されるのである。

「ええ、あなたたちこのまま学園に行くでしょ？でもクラブハウスから正門に行くのもめんどくさいでしょ？だからこうして届けてあげたのよ。」

「何をですか？ミレイさん。」

「何って。振り分け試験の結果に決まっているじゃない。」

「なるほど、わざわざそれを届けてくれたんですか先輩。」

「ええ、そうよ。」

渡された封筒を開けて中身を確認する俺とライ、結果は・・・

ルルーシュ・ランペルージ・・・Aクラス

ライ・・・Fクラス

予想どおりの結果だった。

ライは今まで記憶の手がかりをさがすために町に出ていたため、本格的に学園に通うのは今日からである

結果を見た会長は。

「まあ貴方ならFクラスでもうまくやっついていけるわよ。」

「ありがとうございます、ミレイさん。」

「なんでお礼なんて言っているのよ、それにあなたの實力なら三年の振り分け試験で確実にAクラスになれる實力があるんだから1年間の辛抱よ！」

「ありがとうございますミレイさん。じゃあ僕はこのまま学園に向かいます。」

「ええ、わかったわ。」

そう言っってライは学園に行った。



「ルルーシュ、あなたの要望どおりに学園のバリアフリー化は春休みのうちに終わらせておいたわ。」

「ナナリーのために、ありがとうございます先輩。」

「いいのよ、かわいいナナリーちゃんのためだもの！」

そう、ナナリーは幼いころ、事故により足が動かなくなり（目は見えている）今は車椅子の生活送っている。そのため俺たちもクラブハウスの1室をかりている。

「ところで先輩？」

「ん？なに？ルルーシュ。」

「あいつ（・・・）は？」

「ああ・・・予想どおりよ・・・。」

「そうですね・・・では、朝食のかたづけが終わったら学校にいきますので。」

先輩が学校に向かった後、朝食のかたづけをして俺たちは学校に向かった

スザク side

7時55分

「はあくしくしゅん！・・・んんん花粉症かな？」

桜が並ぶ道を歩いていると、突然くしゃみが出てきた。

「体調が悪いのですか、スザク？」

「だいじょうぶだよユフィ。それに体が丈夫なのがとりえだからね。」

「そうですね、大事無くて良かったです。」

いっしょに歩いているユフィが心配してくれたけど、僕が問題ないことを伝えると安心してくれた。

なんか、こう心配してくれるのが、とてもうれしかったりする。

「ごきげんよう、西村先生。」

そうこうしている内にいつのまにか校門の前まで来ていた。

「おはようございます、西村先生。」

「おはよう、枢木、ブリタニア。これがお前たちのクラスだ。」

そう言っつて西村先生が茶封筒をくれた。

「枢木、お前は体だけではなく頭も使うことも覚えなくてわな。」

「ハハハ、・・がんばります。」カサツ

枢木スザク　・・・Fクラス

「どうでしたか？スザク。」

「うん、やっぱりFクラスだったよ。ユフィはどうだった？」

「私はAクラスでしたわ。」

「そっかあ、さすがだねユフィ。」

「でも、私はスザクと同じクラスになりたっかつたですわ。」

「うん、ありがとうユフィ、そう言っつてくれるだけでうれしいよ。」

「うふふ」

『『『・・・チツ!』』』

なんか周りからすごい視線を感じるけど気にしない。

『・・・だが、おまえは男として立派なことをしたのだ、誇りに思っているぞ。』

『ありがとうございます。西村教諭。』

あれ？あれは刹那？いつたい何の話しているのだろう。

フェルトside

7時52分

「ごめんね刹那、私なんかの為に巻き込んだじゃって。」

私は今、刹那に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになっている。振り分け試験のとき高熱で倒れた私を保険室まで運び、看病までしてくれた。

そのせいで、そのままテストを受けたらそれなりの点数が取れるはずの刹那まで無得点扱いになり、Fクラス行きが決定したのが分かっていたからである。

「もう過ぎたことだ、気にしていない。それに倒れた仲間をほおって置くことは俺には出来なかった、それだけだ。」

刹那はそう言うってくれるけど、私の気持ちは晴れない。

「おはよう、セイエイにグレイス。」

「おはようございます西村教諭。」

「あ、お、おはようございます。」

私が落ち込んでいたら、門の前に立っていた西村先生があいさつを

してきた。

「よし、これがお前たちのクラスだ受け取れ。」

先生はそう言っつて茶封筒を渡してきた。

「しかし残念だったなグレイス、でも体調管理も勉学の一部だ。これから注意するように。」

「はい。」

「そしてセイエイ。おまえもバカなことをしたものだ。すぐに戻ってくれば他のテストを受けられたものを・・・」

「む・・・」

私は先生の言い草に腹をたてた。たしかに私が体調管理を怠つたせいで、熱を出して倒れた。それはいい、けど助けてくれた刹那までがバカにされるのはガマンできなかった。

「あの！「だが、おまえは男として立派なことをしたのだ、誇りに思っつていいぞ。」・・・」

「ありがとうございます。西村教諭。」

よかった、あとちよつとで先生に向かって文句を言いそうになつたけど。先生もちゃんと見てくれたんだ。

「おゝい！刹那〜！フェルト〜！」

「ごきげんよう、刹那、フェルト。」

少し歩くとスザク君とユーフィミアさんが声をかけてきた。

「おはようございます。」

「枢木スザクか、何のようだ？」

「何のようだはごあいさつだな。さつきまで西村先生と話していた  
ようだけど、どんな話をしていたんだい？」

「いや、たいした話ではない。」

「そっかぁーならいいや。それより君たち、どのクラスになっ  
たんだい？」

「Fクラスだ。」

「おなじく。」

「え？君たちならBかCぐらいは行けると思ったのにな、何か事情  
が在るのかい？」

「じつは、かくかくしかじかで私のせいでテストが受けられなかつ  
たんだ。」

「そっかぁ、それは災難だったね。」

「それでフェルトさんは少し落ち込んでいるのですね。」

「だって私のせいで・・・」

「俺は気にしていない、どこのクラスに行こうとやるべき事は変わ  
らない、そうだろ？」

「うん、そうだけど・・・」

「それに、俺は少し安心している。」

「え？」

「信頼できる友人と同じクラスになれたんだ。それだけで安心でき  
る。だからフェルト、お前は俺に関することで気に病む必要は無い。」

「ナデナデ」

「う、うん、ありがとう刹那ノノ」

刹那はそう言いながら私の頭をなでて来たノノ

「（よかったですねフェルト。）」

「（！！ユ、ユーフィミアさん！？いきなりどうしたんですか！？）」

「

少しぼくしていたらいきなりユーフィミアさんが耳元で話しかけて

きた。

「(うーん、ユーフィミアだと長くて言いにくいとおもっているので私のことはユフィでいいですわよ。)」

「(あ、はい、じゃあユフィさんと・・・いやそうじゃなくて、何がよかったですか?)」

「(いえ、いろんな理由があっても好きな相手と同じクラスになれるのは嬉しいのではないのですか?)」

「す、好き!!/!/」

「?どうしたフェルト、大声を出して。」

「え!...いや、なんでもないよ刹那、アハハハ・・・」

「?そうか。」

「(なななに言ってるんですか!わたしは別に刹那のことなんて...)」

「(うふふ、いえしっかり・・・)と好きだっつて顔に書いてありますわよ。」

「(あ、いや、その/!/!/)」

「(うふふ、これから同じクラスなのですから、がんばってくださいいね。私、応援しますわ!)」

「え、あ、はい/!/!/」

その後私たちはユフィさんと分かれて私たちのクラスにむかった。私はその時まだ顔が赤くなっていたと思う。

ボツスン side

8時06分

「おはよーっす、鉄人先生。」

「西村先生と呼べ! まったく・・・これがお前のクラスだ。」

「あざーつす。・・・さてさて俺はどこのクラスかな」  
振り分け試験は結構手応えあったからな、それなりのクラスになっ  
ているはずだぜ。

「おゝい！ボツスン！」

「ん？…おゝヒメコにスイッチ、今来たのか？」

『ああ、さっきそこでヒメコと合流した所だ』

こいつは笛吹和義つすいかずよし通称スイッチだ。こいつだけ台詞の「」がちがう  
のは自分の口じゃ喋りたく無いとか言つてスイッチの持っているパ  
ソコンのゴンサーオウサーソフト  
『音声合成ソフトだ。』  
で喋つてを使っているからだ

「スイッチ、誰に向けてしゃべつとんの？」

『ちなみに2月28日生まれ魚座で血液型はA B型、好きな魔術は  
黄金練成だ』

「いや、だから誰に向けてしゃべつとんねん！」

さつきからつつこんでいるのは、ヒメコこと鬼塚一愛おにすかかひめだ。性格はガ  
サツで乱暴「誰がガサツで乱暴やねん！サイクロンのシミにするぞ  
ボケ！」と、愛用のホツケーステイックを振り回し、体に酸の血が  
流れている危険人物だ

ヒュン！！

ドゴオ！！「あべし！！」「ドサア！」

「だからウソの設定言うなや！！シバくでゴラア！！」

「シバいてから言わないでくださいますかねえ！」

えゝ気を取り直して。

そしてこの俺！ボツスンこと藤崎佑助！  
ふじさき ゆうすけ

この3人で生徒が学園生活を円滑に送るための人助けの部活をしている！！

トラブルは迅速に解決

部活の助っ人から悩み相談

落とし物の搜索に裏庭の清掃まで、依頼人を必ず満足させます

みんなに頼られる学園のサポーター集団、それが！！ 学園生活支援部、通称“スケット団”だ！

「ウソの設定言うなや。周りのみんなは言うてるで、スケット団はただの便利屋やて。」

もう評判はグズグズや。 実際依頼は来えへんし、毎日ヒマでグツダグダ。 更にはクラスメートが依頼もあらへんのにやって来て、ちよつとしたたまり場みたいになつとるからさらに依頼人がスツカスカ。

「いや、それは・・・な？」

「これも部長がズルツズルやからこんななんねん！！」

「ズルツズルって何！？せめて分かる言葉で言つて！！何か傷つくから！！！！」

「えゝさて、いきなり話戻すけど。お前らどこのクラスになったんだ？」

「ほんまにいきなりやな。」

「まあまあ、いいから」

『実は俺たちもまだ見ていない。』

「そっか、それじゃあ一気に見ようぜ。せーの。」  
「  
バツ！」



笛吹和義・・・Bクラス  
鬼塚一愛・・・Fクラス

「あゝやってもうたな、Eくらいは行くと思ったんやけど」

『俺は予想どりの結果だったな』

「スイッチ頭ええもんな、あゝあたしFでやっていけるか不安やわ」

『まあ、頑張れよww(wwww)』

「うわ、その言い方腹立つわあ。・・・ん？どないしたんボッスン。  
黙り込んで？」

「あ、あのね。俺・・・」

「うん」

「だ、代表になっちゃった！！」

「代表？なんの？」

「だから・・・クラス代表になっちゃた！！」

「はあ！？ボッスンが！」

『それでどこのクラスの代表になったんだ？』

「あ、ああこれなんだけど」

藤崎佑助・・・Dクラス 代表

「な！」

『たしかに“代表”と書かれているな』

「でもすごいやん、代表なんてなかなかなれるもや無いで！」

「でもよあ、クラスの責任は代表の責任みたいな所があるじゃん？

ほら、今年から始まるあれ(・・・)が有るだろ。もし負けて設備  
が下がったらクラスの連中に何言われるか！」

「うわゝ相変わらずヘタレやな・・・大丈夫やて、みんな寄  
つてかかってボッスンを責めたりせえへんて」

『そうだ。それにあれ(・・・)をするにはまだまだ時間が要るだろ

う。新学期早々いきなり仕掛けてくる事なんて無い』

「せやせや。せっかく代表になったんや、代表らしくドーンと構えときゃええねん！」

たしかにまだ今日は新学期初日、いきなり来ることはないよな。なんか気が楽になってきた！

「そ、そうだよな！俺は代表だもんな！ドーンとしてりゃ良いもんな！よし、なんかやる気出てきた。待ってるく俺のクラス、今行くぜー！」ビューン

「あ！・・・行ってもうた・・・」

『俺たちも行こう』

「そやね」

なのは side

8時13分

「はあ」

「なのは。溜め息ばっか」

「だって」

「だってやないで。体調管理も試験の一つや」

「む」

そう私、高町なのはは、振り分け試験一時限目の時に、体調不良で倒れたのだ。

「でも、そのおかげで、あの人との運命的な出会いをしたんだよね」  
「そうそう。あの時のなのはちゃん、顔真っ赤にして可愛かったで」  
「ッ／＼ あ、あれは・・・その・・・た、た、体調が悪かったからであって・・・」

「だけど、なのはこの前もその人のこと「わーわー！フェイトちゃんそれは、言っちゃダメエ！」

「なんや、うちにだけ隠し事かいな」

「実は

・  
・  
・

というわけ

「なるほどな。それで、その人名前なんていうの」

「実はなのはも知らないみたいなんだ。でもきつとやさしい人なんだよ。」

なのはが好きになるような人だからね」

「ちよちよつと、す、好きだなんて／＼ ゴニヨゴニヨ」

「いやゝええなあなのはちゃん。恋する女の子の顔やゝ」

「はやてちゃん／＼！！」

はやてちゃんの言葉に顔を赤くしていると。

「オッス！はやてゝ」

「ん？おゝりっちゃんに湊ちゃんにムギちゃんやんかゝ おはよう

さん」

「おはよう」

「おはよう。はやてちゃんになのはちゃんにフェイトちゃん」

「「おはよう」

軽音部のみんなが・・・あれ？

「ねえ、唯ちゃんは？一緒じゃないの」

私が軽音部の残りのメンバーの平沢唯ちゃんの事を聞くと

「あゝ唯な・・・唯はたぶん・・・」

唯 side

7時00分

ジリリリリ

うゝん目覚ましうるさいよゝ

「うゝん、うぬゝん、よっ、ほっ」ダン!

うるさいのが無くなった。おやすm

ガチャ 「お姉ちゃん、そろそろ起きないと。お姉ちゃん」

ガバア! 「うええ! は、8時!? ち、遅刻だゝ!」ドタバタ

「何で急ぐの?」

急いで着替えて学校行かなきゃゝ

「とゝう」ツルン「へ?」ドスン!

いたたゝタイツが滑ってころんだゝ

あ! 早く出ないと。

あ、食パンがある。

「いつてきまゝふ!」

いそがないとゝ

「あらゝ唯ちゃん、おはよう」

「おふあおようございまゝふ」

走っていると隣のおばちゃんがあいさつしてくれた。少しお話し  
かったけど急いでいるからまた今度ゝ

「ほ、ほ、ほ、ほ、ふう〜着いた〜間に合った」

「ん？平沢か。どうしたそんなに急いで」

着いたらそこには宗ちゃん先生が立っていた。

「あ！宗ちゃん先生、おはよ〜」

「西村先生と呼べ、で？そんなに急いでどうしたんだ？」

「へ？だってもうすぐ8時半だし」

「何を言っている。まだ7時30分を越えたばかりだぞ」

「え？・・・と、時計見間違えた〜！」

「そうか・・・ちなみにおまえは今日一番最初に来た生徒だ。おめでと〜」

「うう〜、もつとゆっくりできたのに」

「落ち込んでいる所悪いのだが、お前のクラスだ」

そう言っつて宗ちゃんは私に封筒を渡してきた。

「え〜と」ガサガサ

平沢唯・・・ Fクラス

「ありゃりゃ」

「まあ、1年間がんばるんだな」

「は〜い・・・」

私は皆より一足早くFクラスに向かうのだった

透 side

8時16分

「...みたいなことに...」

「それほんまなん？」

「だとおもしろいよね」

「て、嘘かい！」

「いや〜わかんないぞ〜」

「さすがにそれは無いと思うよ」

「そうだぞ律、いくらなんでも、それは無い」

「いやいや漣〜だって唯だぜ〜有ると思うぜ〜」

「・・・い、いやだから無い・・・と思う・・・」

と私たちが話しながら喋っている。

「あれ？ねえはやて、あそこにいるのってシグナムじゃない？」

「ん？…ほんまや、シグナム姉ちゃんがある」

そこには校門の前に立っているのはジャージに髪をポニーテールにした女性、シグナム先生が立っていた。

「どうしたんシグナム姉ちゃん、こないな所で」

「ん？ああ、おまえたちか。いや、西村先生が学園長に呼ばれてな。」

「

」それでシグナムがその代理ですか。」

「そういうことだ。だがテストタロツサ、それとはやて、私はこの学校の先生でお前たちは生徒だ。だから私のことはシグナム先生と呼ぶように」

「はい、シグナム先生」

「了解や、シグナム先生」

「それでいい。・・・これがクラス分けの結果だ」

シグナム先生から人数分の封筒を受け取った。

「漣〜。クラスどこになった？」

「もちろん、私はAクラスだぞ。そう言う律は？」

「私はDクラスだよー！」

「おお〜りっちゃんにしては頑張ったやないか」

「にしては、ってなんだよにしてはって」

「ムギはAクラスだよな」

「ごめんなさい、澪ちゃん。私Bクラスだって。」

「えっ！ムギ・・・ホ、ホントに？」

「うん。ホントなの。」

そ、そんなじゃあ私だけAクラス？

「（いや、まだなのはたちが居る。）…な、なのはたちは・・・」

「ごめんね、私はテストの途中で退場したからFクラスなんだ。」

「うちはBクラスや。」

そ、そんな・・・みんな別々のクラスに・・・すこし、さびしくなってきた。

「だいじょうぶだよミオ」

「フェ、フェイト？」

「私もAクラスだから、いっしょだよ」

「うっ〜フェイト〜！！」ガバア！

「よしよし」

うっうれしくてとっさにフェイトに抱きついてしまった／＼

「おっい、早く行こうぜ〜」

抱き付いていると律に呼ばれたのでフェイトから離れた。

「こ、これからよろしくね。フェイト」

「うん、こちらこそよろしくね。ミオ」

吉井明久 side

8時30分

僕は、走って学校へ向かっていた。  
なぜなら時刻は8時30分遅刻である。

「吉井、遅刻だぞ」

ドスのきいた声に呼び止められる。

「あ、鉄じ…じゃなくて、西村先生。おはようございます。」

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

「ん、そうか？ それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうか」

「あ、すみません。え〜っと…今日も肌が黒いですね」

「・・・お前には遅刻の謝罪よりもおれの肌の色の方が重要なのか？」

「そっちでしたか。すみません」

「まったくお前というヤツは・・・ほら、受け取れ」

鉄人が溜め息混じりに、僕に封筒を渡してきた。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表するんですか？ 掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってワケだ」

「ふーん。そういうもんですかね」



僕は適当な相槌を打ちながら封に手をかける。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

「おれはお前を一年見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ。」

「それは大いなる間違えですね。そんな誤解をしているようじゃ、さらに『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

吉井明久『 Fクラス 』

「お前はバカだ」

こうして僕の最低クラス生活が始まった

上条 side

8時40分

わたくし上条当麻はただいま学校に向かう道を全力で走っていた。  
なぜなら……

「なあ〜!!!なぜか目覚まし時計が全部止まっているし!

携帯もサイレントモードにいつのまにか設定されてるし!

完全に遅刻だぁ!!!」

と、このように大事な始業日の日に遅刻してしまったからである。

「上条、遅刻だぞ!」

「すみません!鉄人先生!」

「西村先生と呼べ!」

鉄人先生がなんか言っているが息切れしている俺には聞こえない

息を整えていると鉄人先生がなんか申し訳なさそうに俺をみていた。

「どうしたんですか、そんな顔して」

「あゝ上条、落ち着いて聞くんた」

「はい……?」

「じつはな………無いんだ」

「……へ?何が無いんですか?」

「……お前の答案用紙が無いのだ」

目の前の鉄人がなんか言っている、答案用紙が何とか……

「……あれ?聞き間違いかなゝ えゝと、何が無いんですか?」

「お前の答案用紙だ」

「え?ハア……ハア!!!答案用紙が無い!!! それどういうこ

とですか先生!!!」

今回はかなり良い点取れてDクラス、良くてCクラスまで行く自身があつたのに!!!

「実はだな、つい先ほど学園長に呼ばれてな」

「ふんふん」

「監視カメラにそのときの映像が残っていたんだ……」

-----

振り分け試験採点終了後

振り分け試験の採点が終わり、後は点数を打ち込んで機械が勝手にクラス分けをするだけとなった。

渡り廊下で採点が終わった用紙を運んでいる一人の教師が居た。彼女の名前は鉄装てつそう 綴里つじり文月学園の教師である。眼鏡を掛けており、かなりの巨乳である。

「ふう〜、これを運んだら仕事終わりだし、ひさしぶりにゲームセンターによつて 拳でもやろうかな〜」

とぼやいているとするとそこにテニスボールが転がってきた！

「危ない!!」

そして彼女はそれを踏みそうになったがそこに声が飛んできた

「え？ おつとと!!・・・あ、危ないところだった〜」

「大丈夫でしたか!？」

声をかけてきたのは、テニスウェアを着た高町なのはだった。

「いや〜ありがとう助かったよ。じゃあこれ運ばないといけなから。部活、がんばってね」

「はい」

と鉄装が一步踏み出そうとしたとき、風が吹いた!

その風でまだ転がったままのテニスボールが転がり、鉄装が踏み出した足の着地点に転がり込んだ。

そしてそれを踏んだ!!

そして見事に転んだ。もちろん手に持っていたみんなの試験結果もぶちまけて・・・

「だ、大丈夫ですか!？」

「アタタ〜・・・ハッ!い、いけない、振り分け試験の結果の用紙

がー！ お願い！！集めるの手伝って！！」

「わ、わかりました！」

二人はちらばった試験結果の用紙を集めだしたが、二人は気づかなかった。上のほうに舞う1枚の用紙を・・・

その用紙はうまいこと風に乗リ、そのまま流されて。学校の裏手にある焼却炉の中に見事に入ったのである。

だが、運よくその焼却炉はまだ点火されていなかった。

しかしそこに一人の男性がやってきた。

肩まで届く赤い長髪に銜えタバコ、耳に着けた大量のピアス、指すべてに銀のリングを付け、右目の下にはバーコードの刺青を入れた、いかにも不良っぽい長身の男。

彼の名はステイル。マグヌス 新任の教師である。不良ぽく見えても若くして教師になれるほどの天才である。

「なんで僕がごみ捨てなんてしなくていけないんだ。僕は当番じゃないのに。」

グチグチと文句を言いながらごみを焼却炉に入れて火を入れよとしたが、彼は懐から何か取り出した。

「せっかくだからチュウさんからもらったこの発火材“魔女狩りの王”を使ってみるか。」

ステイルは発火材を躊躇無く入れた。

ちゅどおーん！！

入れたとたん焼却炉が爆発的に燃え上がった！ もう爆発している

んじゃないかていうぐらいに!!  
それを見ていたステイルは

「うん。すべて燃えるね」

と、かなり楽しそうだった。

-----

「と言う訳で、お前の採点結果が紛失し、答案用紙もすべて処分してしまった。だからお前の点数を確認することが出来ないんだ」

「そ、そんなorz・・・じ、じゃあ俺のクラスは・・・」

「ああ、申し訳ないが決まりだから・・・お前のクラスはFクラスだ」

そ、そうですか・・・これはあれですか・・・

「ふ、不幸だあああああ!!!」

こうして俺の最低クラスでの不幸な生活が始まった

## 第二問 自己紹介（前書き）

### 第二問

「以下の意味を持つことわざを答えなさい。」

「（１）得意なことでも失敗してしまうこと」

「（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え」

姫路瑞希の答え

「（１）弘法も筆の誤り」

「（２）泣きつ面に蜂」

上条当麻、高町なのはの答え

「（１）猿も木から落ちる」

「（２）踏んだり蹴ったり」

教師コメント

正解です。上条君は国語は得意でしたね。

土屋康太の答え

「（１）弘法の川の流れ」

教師コメント

シュールな光景ですね。

平沢唯の答え

「（１）憂も料理を焦がす」

教師コメント

ことわざじゃないので残念ですが不正解です。

刹那・F・セイエイの答え

「(1) スメラギ・李・ノリエガのよみ間違い」

教師コメント

これもことわざじゃないので不正解です。

吉井明久の答え

「(2) 泣きつ面に蹴ったり」

教師コメント

君は鬼ですか。

鬼塚一愛の答え

「(2) 泣きつ面にとどめの1撃」

教師コメント

本当に鬼ですか。

土御門元春の答え

「(2) 上やんの不幸」

教師コメント

上条君が向こうで泣いていました。

## 第二問 自己紹介

明久 side

Fクラスと書かれたプレートのある教室の前で少しだけ躊躇していた。

遅刻なんかしてきて、悪い印象を持たれたりしないだろうか。なんて、考えすぎかな。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫やろう」

台無しだっ！

余りの暴言に僕は相手を睨みつけた。

でもよく見てみると知っている顔だった。

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃあ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。これでこのクラスの全員が俺の兵隊というわけだ」

そう言っただけでクラスメイトたちを見下ろしている雄二。

そう、皆床に座っている。

どうしてか？ その理由は簡単。椅子が無いからだ。

「それにしても……さすがFクラスだね」

とりあえず空いているスペースでも探そう。

「えーと、ちょっと通してください」

不意に下のほうから可愛らしい声が聞こえた。……ん？下のほう



から？

そこにはピンクの髪にピンクのワンピースを着た、見た目7歳ぐらいの女の子がいた。

「それと早く席についてください、HR始めちゃいますので」

学生服も着ていないし、どう見たって十代には見えない。・・・そうか！

「お譲ちゃん、どうしたの？もしかして迷子になっちゃったの？」

きつと学校の先生の誰かに親がいて、この子はその親を追いかけまわってきたんだ。

いや〜今日は冴えてるな〜この事実すぐに思い当たるなんて。

「ちがいます！私はこのクラスの担任なのです！」

「だめだよ。ウソを付いちゃ。で？お父さんかお母さんはどこにいるのかな？」

まったく！こんな子供をほったらかしにするなんて、あんまりじゃないか。

「だから！先生はれっきとした大人なのですよ！・・・はい、免許書！」

すると女の子は懐から顔写真がある本物の免許書を見せてきた。生年月日の所を見ると明らかに僕より前の時代の年号が書かれていた。

「・・・えええ！？この外見で年が「わあー！言っちゃだめなのですー！」だってー！？」

ということ、この人が担任の先生!?

「と、とにかく! 分かったら早く席につくのです!」

「……はい!」

同じように驚愕していた雄二と僕は戸惑いながらも空いている席(?)に座った。

「はい。みなさんおはようございます。私が二年F組担任の月詠小萌つぐよみです。よろしくおねがいますです」

月詠先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。このクラス、チヨークすらろくに用意されていない。

あ、先生が懐からチヨークを取り出して書こうとしている。

「ふん!にゅ〜と、とどかない……!」

一生懸命背伸びをして名前を書こうとしている。なんか見ていると少し和む。

《か、かわいい!》

《一生懸命背伸びしている姿、いい》

《ああ、名前を書きたいんやけど踏み台が無いと届かない小萌先生、萌えるで〜 ippその事、僕が踏み台になってあげたい》

《お前ロリコンの上 かよ。》

《あはは〜ロリが好きなんとちゃうで〜 ロリも好きなんやで〜》

みんなも似たようなこと思っていたんだね。最後のは気にしない方向で。

「……えっと、じゃあ自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人

「たちからお願いしますです」

名前を書くのを諦めた先生は自己紹介のコーナーに移ったみたいだ。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

誰かと思ったら、秀吉じゃないか。去年同じクラスの時から思ってたけど、相変わらずかわいいなあ

つと危ない。秀吉は男だった……よね？

「……土屋康太」

今度は誰かな？つて、今度も知り合いだ。去年から無口な所も変わってないな。

「刹那・F・セイエイだ」

短い！

「えっと……フェルト・グレイスです。よろしくお願いします」

《《付き合ってください》》

「う、ごめんなさい」

今度は女子の声だ。みんなからのアプローチを一蹴するとすぐに席に座った。

「……です。日本語の話はできるけど読み書きは苦手です」

と、少し考え事をしているうちにまた次の人……

「趣味は吉井明久を殴ることです」

誰だ！？ 恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つやつは！

「ハロハロー」

笑顔で手を振るのは、

「……あう。し、島田さん」

去年のクラスメイトで僕の天敵である島田美波さんだ。

「次は私やな。……鬼塚一愛や。部活はスケルト団に所属しとる。何か頼みたいことが有るならいつでも部室に来てや、相談に乗るさかい」

次も前のクラスメイトの鬼塚さんだ。関西弁で姉御肌の女性だ。

「土御門元春だ。よろしくたのむぜい」

学ランの下にアロハシャツを着てさらに金髪にサングラスを掛けた軽い感じの男子だ。

「平沢唯です。軽音部です」

《《《付き合ってください》》》

「ごめんなさい。私好きな人いるから」

またもやみんなからのアプローチを一蹴。さらに好きな人宣言までした平沢さん。ていうかまた元クラスメイト？どんだけ顔見知りがこのクラスに来ているんだ？

「高町なのは、テニス部です」

《《《付き合ってください》》》……《《《》》》

今度はアプローチの途中で遮られた。

よし次は僕の番だ

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に“ダーリン”って呼んで下さいね」

《《《ダアアーリーーン！！》》》

「失礼。忘れてください。とにかくよろしく願いします」  
野太い声の大合唱。思った以上に不愉快だ。

ガラリ

「あの、遅れてすみません。保険室に行っていたら遅くなってしま  
って」

不意にドアが開き女子生徒が現れた。

「だいじょうぶなのですよ、保険室のシャマル先生から連絡は受け  
ていますから。」

それじゃあ姫路ちゃんも自己紹介をして好きな席に座ってください」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしく願います・  
」

《はいっ！ 質問です！》

「あ、は、はいっ。なんですか？」

男子生徒が姫路さんに質問する。

《高町さんも気になったけど。なんでここにいるんですか？》

失礼な言い方だけど、たしかに彼女たちの成績ならAクラスにいて  
もおかしくないはずだ。

「そ、その・・・振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました・  
」

「私も姫路さんと同じで試験のときに高熱で倒れちゃって」

その言葉を聴き、クラスの中でもちらちらと言いつの聲が上がる。

《そういえば、俺も熱が出たせいでFクラスに》

《ああ。科学だろ？アレは難しかったな》

《俺は弟が事故にあったと聞いて実力が出し切れなくて》

《黙れ一人っ子》

《僕なんかFクラスの担任に小萌先生がなるって聞いたから あえて何にも書かずに白紙で出しましたよ》

《今年一番の大嘘をありがとう》

《いやいや、ほんまやっつて》

これは想像以上にバカだらけだ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

逃げるように僕と雄二の隣の空いている卓袱台に付く彼女。

よし。これは話しかけるチャンス！

「あのさ、姫z「姫路」」

僕の声にかぶせるように隣の席にすわっている雄二が声をかける。

おのれ、雄二め。なぜ毎回、僕の邪魔をするんだ！

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしくたのむ」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「ところで、体調はまだ悪いのか？」

「あ、僕も気になる」

「よ、吉井君！？」

僕の顔を見て驚く姫路さん。ちよっと、いやかなりショックだ。そんなに僕はブサイクかな？

いやいや、そんなわけが

「姫路。明久がブサイクですまん」

雄二？そこは普通フォローが入るんじゃないの！？

……うう、段々と自信がなくなってきた。

「そ、そんな！目もパツチリしているし、顔のラインも細くてきれいだし、全然不細工なんかじゃないですよ。むしろ……」

「そういわれると、そこまで見てくれは悪くないかもしれないな。俺の知人にも、明久に興味を持っているやつがいたような気がするし」

「え？それは誰」

「そ、それって誰ですか!？」

僕の声が姫路さんの声にかき消される。

それにしてもそんな子がいたんだ。雄二も今まで黙ってたなんて、人が悪いなあ

「確か久保……」

久保？久保さんなんて居たっけ？

「利光だったかな」

久保利光 性別：オス

「……………(ぐすつ)」

「おい、明久。声を殺してざめざめと泣くな」

あんまりだ。雄二、そんなに僕を追い詰めるのが楽しいのかい？

「半分冗談だ！安心しろ」

「半分!？残り半分は？」

「ところで姫路、体の調子は大丈夫なのか？」

「あ、はい！もう大丈夫です」

「雄二!？なんで取り合ってくれないの？全部冗談なんだよね？」

僕は、思わず大きな声が出てしまう。

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩きながら注意してくる。

「あ、すいませ  
バキィツ。バラバラバラ……………」。

突如、先生の前の教卓が崩れ落ちてく。うわあ。まさか、軽く叩いただけで壊れるなんて、どこまで最低な設備なんだろう。

「え〜……………替えを持ってきますので、少し待っていてください！  
先生が気まずそうに出て行った。事故とはいえ、壊してしまったからだろうか？あの場合は仕方がないと思うんだけど。

「あ、あはは……………」  
隣で姫路さんが苦笑いしていた。…………ふと思ったが、やはりこの設備は姫路さんに適していないと思う。

姫路さんは本来高い能力を持っているのに、実力を出せなかったからって、Fクラス行きはあんまりだと思う。なんとかして姫路さんの為にもう少しまともな設備を手に入れたいな。

「……………雄二ちよつといい？」  
あくびをしている僕の悪友に声をかける。

「ん？なんだ？」  
「ここじゃちよつと話しにくいから廊下で」  
「別にかまわんが……………」

雄二は少し怪しみながらもついてきてくれた。

「んで、話ってなんだ？」  
「この教室のことなんだけど……………」  
「Fクラスか。想像以上に酷いな」  
「雄二もそう思うよね？」  
「当たり前だ」



「Aクラスの設備は見た？」

「ああ。すごかったな。教室というかホテルだったな」

一方はチヨークすらないひび割れた黒板で、もう一方は、値段も分らないほど立派なディスプレイ。これで、不満を抱かない人間がないわけがない。

「そこで僕からの提案。二年生になったんだし、試召戦争をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ？」

急に雄二の目が細くなる。少し警戒されたかな？

「いや、あまりにもひどい設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味がないおまえが、今更勉強用の設備に興味を持つわけないだろ？」

「そ、そんなことないよ。興味があればこんな学校に来る訳が」

「おまえがこの学校を選んだ理由は、試験校だからの学費の安さが理由だろ？」

くっ！雄二には、この学校に来ている理由を話していたんだっけ。さて、どうやって納得させようかな。

「あー、えっと、それはその……」

「姫路瑞樹が理由……って所かじゃー」

「わぁ！」

いきなり背後から声を掛けられた。振り返ると。

「そんなに驚くんじゃないぜい、吉井」

土御門君がいた。

「ど、どうして土御門君が!?!」

「いや、お前たちが急に出て行ったから後をつけたら、なんか面白そうなこと話してるじゃないか」

「で、でもそれだけでどうして姫路さんのためだと?」

「そんなのさっきの会話を聞くだけでだいたいわかるにやー」

そんなに僕って分かりやすいかな? そんなつもりはないんだけど…。

「まあ気にするな明久。おまえに言われなくても、俺自身がAクラスに仕掛けようと思っていたからな」

「え! どうして?」

雄二だって教室の設備に、あまり関心がないと思っていたのに。他に何か思惑があるのかな?

「ほう。それはどうしてかにやー」

「世の中学力がすべてじゃないって、そんな事を証明を試みてみたくな」

「???」

「なるほどな・・・よし、俺も協力するぜい坂本」

「ああ、助かる」

「ちょ、ちよつと、雄二? 土御門君?」

「おっと、先生が戻ってきたみたいだな。クラスに入るぞ」

「あ、うん」

僕は雄二と土御門君の後について、教室に入ってしまった。

### 第三問 試験召喚戦争（前書き）

すいません。

話数間違えたので修正します。

あと、セリフと地の文だけでなくセリフ同士も1行開けた方がいい  
ですかね？

ご意見おねがいします。

### 第三問 試験召喚戦争

Fクラス side

明久と雄二が外に出て話し合っている時、教室では。

「おつはよー、なのはちゃん」

「あ！唯ちゃん。おはよう」

唯がなのはにはなしかけていた。

「唯ちゃん、朝どうしたの？」

「朝？」

「うん。私、軽音部のみんなといっしょに登校したけど唯ちゃんだけ居なかったから、どうしたのかわかって」

「いや〜実は……………」

唯は朝、時計を見間違えて今日一番に登校したことを話した。

「…………あはは、（律ちゃん言っていたことが本当に当たっちゃった…………）」

そ、そうだ。さっき自己紹介のとき“好きな人が居ます”って言うていたけど本当なの？」

「え？…………う、うん／＼」

「へ〜で、どんな人なの？その人」

「うん。その人、当麻君って言うんだけど。前に私が困っていたときに助けてくれてね。とつてもかつこいいの！」

「へ〜 どんな人なんだろう・・・」

なのは side

唯ちゃんが好きになった人って困った人を助ける素敵な人なんだね。あの人もそんなことを言っていたなあ。

私が唯ちゃんの好きな人の事を聞いていたら廊下に出ていた三人が教室に入ってきた。

少ししてから担任の子萌先生といっしょに見覚えのある一人の男子生徒が入ってきた。

(あれ？ あの人は)

「いや〜助かりましたよ上条ちゃん。先生一人では運ぶのに苦労しましたから」

「いや俺も遅刻してきたからお礼を言われても・・・」

「それもそうですねー。じゃあ自己紹介おねがいますねー」

「はい。上条当麻です。よろしくおねがいます！」

「はい、よく出来ました上条ちゃん。それでは好きな席に座ってください」

「うーす」

試験の時、高熱で倒れた私を保険室まで運んでくれた人だ。そのときいろいろあっただけ。

そっか、上条君って言うんだ。

私のこと覚えていてくれてるかな／／／

……あれ？上条 当麻君？

「おはよー。当麻君！」

「おっす、平沢！ お前もFクラスか」

「うん！ 同じクラスになれてよかったよー／／／」

「そうだな。よろしくな、平沢」

「うん！／／／」

そうか、唯ちゃんが好きな人は当麻君だったのか。

……でも私が当麻君のことを好きなのは変わらない。

だからたとえ唯ちゃんが相手でも私は負けるつもりは無いよ。

Fクラス      s i d e

「では、もう時間の無いですし。最後に代表の坂本ちゃんの発表で終わりにしましょう。」

坂本ちゃん、おねがいします」

「了解」

ゆっくりと教団に歩み寄るその姿は、代表として相応しい貫禄があった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ！呼び方は、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

Fクラスの代表と言っても最下層のトップであって、基本的に皆と変わらないバカだ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

クラスのみんなの視線が雄二に集まったところで、雄二は教室を見渡した。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて、彼らもその備品をみる。

「Aクラスは、冷房完備のうえ、リクライニングシートらしいが……  
………不満はないか？」

《《大ありじゃあっ！！！！》》

二年F組、魂の叫び。

その言葉を境に皆が愚痴をこぼしはじめる。

《いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！》

《Aクラスの奴らも同じ学費だろ？あまりにも、差が大きすぎる》

《大体、なんで座布団なんだよ？Eクラスでも椅子があるのに。不公平だ！》

「みんなの意見はもつともだ。そこで、俺たちFクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

Aクラスへの宣戦布告。それは、Fクラスにとっては無謀といってもいい行動だ。

《勝てるわけがない!》

《姫路さんたちがいたら何もいらぬ》

《あまりにも無謀すぎる!》

そんな悲鳴?がいたるところから上がる。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる」

《何をばかなことを》

《できるわけがないだろ!》

《普通に考えて無理だと思う》

クラス中からもつともな意見が上がる。確かに、現実的に見て勝てるとは思えない。

だが、雄二は

「根拠ならあるさ。このクラスには、試召戦争で勝つことのできる要素が揃っている!」

こんな雄二の言葉を受けて、クラスのみんながざわめく。

「それを今から証明してやる」



「おい。康太。畳に顔をつけて、姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

あわててスカートの押さえる姫路さんと、必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる、康太と呼ばれた男子生徒。

あんなに堂々と覗けるなんてさすがだなあ。手鏡で覗きこむ方法しか考え付かなかった僕とは、格が違う。

「土屋康太。こいつがあの特徴的な、寡黙なる性識者だ！」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニ。その名は、男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられる。

《ムツツリーニだと？》

《馬鹿な、奴がそうだというのか……………？》

《だが見る。あそこまで明らか証拠をいまだに隠そうとしているぞ……………》

《ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………》

顔に付いた畳の後を、未だに押さえて隠している姿を見て哀れに思う。

「姫路と高町のごことは、説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ！私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

「わ、わかりました！」

「うん、がんばるよ」

姫路さんと高町さんの実力は、Aクラスの上位だから、皆の期待も自然と集まる。

《そつだ！姫路さんと高町さんがいるなら、いけるかも！》

《姫路さんサイコー！！》

誰だ！？さつきから姫路さんにラブコールを送っている奴は？制裁が必要だな。

「それに、木下秀吉もいる」

《木下つて、あのAクラスの木下優子の姉妹？》

ん？おかしくないか？自信は無いけど、たぶん漢字が違つと思つ。

「そして土御門には参謀として俺の片腕になつてもらつ」

「よろしくにゃー」

さつき雄二と土御門君が話し合っていたにはこのことだったのか。

「もちろん、俺も頑張る」

《そついえば坂本つて昔、神童とか呼ばれてたんだっけ？》

《それが本当なら、Aクラス級が三人もいるつてことじゃん！》

《これは、勝てるんじゃないのか！？》

Fクラスのメンバーの士気がだんだん高くなっていく。さすが雄二だ！無駄に神童と呼ばれていたわけじゃないね

「そしてこのクラスには、ある三人がいる……スザク、当麻、明久、前に出て来い」

え？ 雄二のやつ僕たちを呼んでどうするんだ？

《スザクって誰だ？》

《まだ自己紹介してないんじゃないか？》

《当麻って、さっき入ってきたやつじゃないか》

《最後に呼ばれた奴って誰だ》

こら！僕はちゃんと自己紹介したぞ！

《でもそいつらが何なんだ？》

たしかに僕たちが呼ばれる理由が無い。

「ああ、こいつらにはある共通点がある。それは……【かん観察処分者さつしよぶんしや】だ！」

クラスの皆がそれを聞いた後、ざわめきだした。

《おい、【観察処分者】って確か……》

《ああ、歴代の先輩の中でもめつたにその称号を持つ者はいないという……》

《あの、都市伝説クラスの称号の……》

《それが、三人！》

クラスの空気が変わり、皆が息をのむのが伝わってくる。

《《バカの代名詞じゃなかったっけ？》》

「ち、違うよ！ただちょっと、お茶目な16歳につけられる愛称で

「その通り！バカの代名詞だ！」

雄二！？そこは、フォローするところだよな？なんで肯定しているの？

「そして！こいつらに三人のことをこう呼ぶ・・・学園の三バカ【デルタフォース】と！！」

さらに雄二は僕が知らない名前を言い放った。

・・・デルタフォースって何？

第三問 試験召喚戦争（後書き）

女子の心理描写がこれでいいのか、わかりません・・・

## 第四問 戦線布告

明久 side

「そして！ こいつらに三人のことをこう呼ぶ・・・学園の三バカ【デルタフォース】と！！」

雄二が声を上げて僕たちのことを発表したけど、僕には聞き覚えの無い言葉だった。

《《なにーーーー！！》》

あれ！？何かみんなは知っているみたいだよ！  
他の二人は分からないって顔をしているけど。

「ねえ雄二。僕そんな風に言われているの初めて聞いたんだけど・・・」

「あたりまえだ。お前たちにバレない様に俺が気をつけて広めたんだからな」

「お前のしわざかーーーー！！」

「はいはい分かったから。説明を続けるぞー」

くそ！ 雄二の奴め。こうなったらなんて呼ばれているのか聞いてから文句言つてやる！

「まず最初に。学年1の運動神経を持ち、どんなスポーツでも必ず結果を残す男。

体力バカの枢木スザク！」

「えっと・・・褒められてるの？これ？」

「次にこいつ。こいつの異名はいろいろ有るが・・・

“悪魔のフラグブレイカー”や“立てた対価にフラグを折る、旗の錬金術師”など皆も1度くらいは聞いたことがあるはずだ・・・  
・それがこのフラグバカこと上条当麻だ！」

「おい！勝手なこと言ってるんじゃないぞ！」

「事実だろ」

「立ったとしても攻略不可能な駄フラグばっかなんだよ！」

「だまつてる上やん、その口塞ぐぞ！」

「ヒデエー！..」

「最後にこいつは.....まあ特に言う事は無い。  
居ても居なくてもたいして変わらん奴だ」

「雄二！流石にそれは非道くない！？」

「そうだな…すまん明久、流石に言い過ぎた……あえて言うなら、  
正真正銘のバカの吉井明久だ！」

「言い過ぎだー！」

「とにかくだ！俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服し  
てみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

「みんな、このオンボロ教室に不満は無いか」

《《《大有りじゃー！》》》

「だが、試召戦争に勝利さえすれば、Aクラスの豪華な設備を手  
に入れる事だって出来る！」

《《《おおーっ！》》》

「我々は最下位だ！」

《《《おおーっ！》》》

「学園の底辺だー！」



《《《おおーっ！！》》》

「誰からも見向きもされない！ これ以上下の無いクズの集まりだ  
！！」

《《《おおーっ！！》》》

「ゆえに俺たちには矢う物は何も無いっ！！！」

《《《うおおーっ！！》》》

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデス  
くだっ！！」

《《《そのとつりじゃーっ！》》》

「ならば筆<sup>ペン</sup>を執れ！ 出撃の準備だ！」

《《《うおおーっ！！》》》

「そついうわけで、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になって  
もらっ」

「雄二！？ちよつと待ってよ！下位勢力の使者って、たいてい酷い

目にあつよね?」

確かテレビとか漫画とかではそうだった気がする。

「ふう、明久。テレビの見過ぎじゃないか?大丈夫だ。Dクラスの連中がお前に危害を加えることはない」

「……………」

でも心配だな。やっぱり他の人に代わってもらったほうが……

「大丈夫や吉井。雄二の言つとつたようにあんたに危害が及ぶことは無いで」

僕が迷っていると、鬼塚さんがそう言ってきた。

「鬼塚さん……でもなんで僕に危害が無いの?」

「実はな……Dクラスの代表つてボツスンなんよ」

「なに! 藤崎がか!?」

へえ、ボツスンが代表か

僕とボツスンは元クラスメイトで、けっこう仲がいい。たまに部室に遊びに行ったりもしている。

「ボツスは友達を傷つけるような奴や無いからなあ……他のやつは知らんけど(ボツ)」

最後は聞き取れなかったけど、たしかにボツスンならそんなことはしない。

「わかった！ 使者には僕がなるよ」

「……あ、ああ。頼んだ」

雄二は何か考え事をしているけど……とにかく早く宣戦布告しなくては！

時は少し逆のぼり

Dクラス side

「あゝこのクラスの担任になった中馬なかつまだ」

Dクラスの黒板の前にいる、白衣にパイプを銜え、見るからにヤル気の無い教師がだるそうに自分の名前を言った。

「自己紹介とかめんどくさいから各自でやってくれ。そういうわけで代表のあいさつやったら終わりにするぞー」

《なんだよそれー》

《ちゃんとやれー》

《職務怠慢!》

「がたがたうるせえーなあ。　　そんなじゃボツスン、さっさと出て来い」

「いやいやいや、怠けすぎだろチユウさん!」

そこに赤い角突き帽子にゴーグルを付けたボツスンが前に出てきた

「うるせえさっさとやれ」

「たくっ……えっと、代表になりました藤崎佑助です。そろしくおねがいます!」

「そういうわけでクラスの問題はすべてこいつが責任をもつからよろしく」

「なあ!　　なに言ってるんだよ、あんたにも責任があるだろ!」

「なに言ってるやがる。お前代表だろ?」

「あんたは担任だろうが!」

「さっき“よろしく”を噛んで“そろしく”になったお前に文句を言う資格は無い」

「うるせえな!　　こっちは代表になってかなり緊張してんだよ!」

ガラア

「あ、あの〜すいませ〜ん」

不意にドアが開き、明久がやってきた

「んああ！？ 今取り込んだ・・・って明久じゃねか。何か用か？」

「あ、うん・・・コホン、FクラスはDクラスに試験召還戦争を仕掛けます！」

《《《なっ！！》》》

いきなりやってきた明久は、Dクラスに宣戦布告してきた。

《ふざけんな！》

《新学期早々にしてくれるんだ！》

《とにかくここに来たことを後悔させてやれー！》

「（ヒッ！ やっぱりこうなるんじゃないか〜！）」

明久の宣戦布告にDクラスは怒り。明久をボッコボコにするため、明久に迫るが。

「まあ、待てよみんな。少しは落ち着けって」

今にも明久に襲い掛かりそうなみんなの前に一人の男子が止めに入った。

《何だお前は》

「おいおい、クラスメイトにお前は無いだろ。まあまだ自己紹介もしていないから仕方が無いが……」  
俺は、ライル・ディランディだ。よろしくな」

《それはわかった、なら早くどいてくれ。そいつを殴れないじゃないか》

《《そうだそうだ》》

まだ明久に襲いかかろうとしているみんなにライルは……

「殴るのは別にいいさ。……けどよお、こいつを殴った所で戦争をするのは変わらん」だ。

だったら戦争中にFクラスの連中を叩きのめせばいい……そうだろ？」

《た、たしかに……》

ライルの言い分によってDクラスのみんなが落ち着きを取り戻した。

「それによお……相手は所詮Fクラスだ。普通にやっても俺たちの勝ちは変わらねえよ。

そうだろ、大将！」

「え？おれ？……お、おう」

そこでライルの挑発と思われる言葉を聞いていた明久が

「……誰が決めた」

「あん？」

「誰が勝てないって決めた！」

明久が声を荒げて叫んだ。

「ほう、と言う事は勝つ秘訣があるって事か？」

「そ、そんなの誰が教えるもんか！」

「・・・まあ、そうだよな」

「とにかく！ 開戦は今日の午後からだ、覚えてろよ！」

「それ、負けセリフだぞ」

「う、うるさい！ とにかくそういうことだから、覚悟しろよ！」

啖呵をきった明久が教室を出て行く。

「なあ明久、一つ聞きたいことが有るんだけど」

ガク！「な、なに？ ボッスン」

が、ボッスンがそれを止めた。

「お前らの所の代表って誰だ」

「雄二だけど・・・それがどうしたの？」

「……………いや、そんだけだ」

「そう……………とにかく！覚えてろ！」

「だから負けセリフだぞ、それ」

明久が出て行った後。ボツスンは何か考え事をしていた。

「どうした大将。考え事なんかして」

「ああ、Fクラスとの戦争の事でな」

「心配しなくても俺たちなら勝てるって」

「……………だといいけどな」

「ん？ そりゃどういことだ」

「みんな、聞いてくれ！」



考え込んでいたボツスンがみんなの前に立ち、問いかけた

「この中で生徒に関する情報に詳しい人物はいないか？」

そう問いかけると、生徒の中からツインテールの女子が出てきた

「それでしたら、初春が適任ですわよ」

「あんたは？」

「申し送れました。わたくし、ジャッチメント風紀委員の白井 黒子と申します。

・・・それで初春ならジャッチメントの権限である程度調べることが出来ると思いますが

・・・いかがでしょうか？」

「そうなのか、初春さん？」

そう問いかけると、頭にお花畑が咲いた（見た目が）女子がノートパソコン片手に出てきた。

「あ、は、はい。今からでも調べられますけど」

「じゃあFクラスの生徒の情報は調べられるか？」

ボツスンがそう聞くが

「ごめんなさい、クラスのメンバー情報は機密事項に入りますから、ジャッチメントでも閲覧できないんです・・・」

「そうか……じゃあ、去年の成績上位者とその人たちの出席席はわかるか？」

「そのぐらいなら、何とかいけます」

「よし、わかった」

それを聞いたボツスは近くの席に座った

「なあ、そんなこと聞いてどうするんだ？」

「まあ、待てつて。今、考えをまとめるから……」

ライルの質問に答えずにボツスは額のゴーグルに手をかけ……

「装着！！」スチャ！

そのままゴーグルをかけた！

キイイイイイイイ

「何をしていますの？」

「まって、今は邪魔しないであげて」

「あなたは？」

「私、高橋 千秋。みんなからはキャプテンって呼ばれているわ。よろしくね」

「ええ」

「それよりキャプテン、大將はどうしたんだ。なんかものすごく集中してるみたいなんだが」

「うん、これは“集中モード”。こうなったボツスは、けっこう凄いわよ」

そんな会話をしている間でもボツスは集中していた。

明久 side

Dクラスに宣戦布告してきた僕は教室に帰ったが、みんなは屋上に行ってるようだ  
だから僕は今、屋上に向かっている

ガチャ

「来たか明久、宣戦布告はしてきたな」

「うん。一応今日の午後開始予定と告げてきたけど」

そこにいたのは

雄二に姫路さん、島田さん、ムツツリー二に秀吉、鬼塚さん、それと上条くん、高町さん、そして平沢さんもいた。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼くらいはまともな物食べるよ？」

「そう思うならパンの一つでも奢ってくれと嬉しいんだけど」

僕は気持ち以外でもありがたくいただくのに。

「吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、……一応食べているよ」

「あれは食べているというのか？」

雄二の横やりが入る。姫路さんの前ぐらいではメンツを保ちたいのに……雄二め！分かっていてやってやっているな！

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って 水と塩だろ？」

「失礼な！きちんと砂糖だって食べているさ！」

「吉井君それ、食べるって言わないと思っけど・・・」

「舐める、が正しいじゃろうな」

皆が奇異な目で明久を見た。

「まあ、飯代まで遊びに注ぎ込むお前が悪いがな」

「し、仕送りが足りないんだよ！」

「なに言っでやがる！俺なんか家計簿を付けて、特売品が取れなきやヤバイぐらい仕送りが少ないんだぞ！遊ぶ金があるだけまだましだろっが！！」

「いや、それもどうかと思っで」

そっか・・・上条君って苦労してるんだな

「ごめん、上条君」

「・・・いや、俺も愚痴を言っで悪かった。それと俺のことは当麻でいいぜ、俺も明久っで呼ぶからさ」

「うん、わかったよ、当麻」

「おう！」

みんなもそう呼んでくれ」

そう言っでみんなも頷いたみたいだ

「……………あの、良かったら私がお弁当を作ってきましたよ  
か？」

「え？」

なん……………だと……………？

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶ  
りだよ」

「どんな生活してるんだ……………？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

「……………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井“だけ”  
に作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも……………」

しかし予想に反して、瑞希は意外な提案をした。

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。迷惑でなければ」

「おゝそら楽しみや、のゝ」

「うむ、楽しみじゃ」

「……………」

「お手並み拝見ね」

これで姫路さんを含めて十人分も作らなければならなくなる。

……いや、さすがに多すぎる。

「はい。じゃあ皆さんの分も作ってきますね」

なのに全く嫌な顔一つせず、そう答える姫路さん。姫路さんって本当……

「姫路さんって優しいね」

心から僕はそう思う。

「そ、そんな」

「今だから言うけど、初めて会う前から姫路さんのことを好き

」

「明久、今振られたら弁当の話がなくなるぞ」

「にしたいと思ってました」

フツ。失恋回避成功。  
流石は僕の判断力だ

「吉井、それじゃあ欲望をカミングアウトした只の変態なっとするで  
畜生！怨むぞ僕の判断力！」

「明久、お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「すげえな。そんな事を堂々と言えるなんて」

「……………通報しとこうか？」

「だって……………お弁当が……………」

カロリーがないと、僕の生活が……………。

「うん。やっぱり人数が多いんじゃない？ 十人分も作るのは  
大変だと思うよ」

「えっと……………実は少し……………」

そこに高町さんが姫路さんを心配して言った。  
たしかに、十人分なんてかなりの量だ。作るのも、持ってくるのも  
大変だ。

「それでね、私もお弁当作ってこようかなって思っているんだけど。  
いいかな？」

「え！ いいんですか？」



「うん。もちろん！」

なんと、高町さんもお弁当を作ってくるらしい。

「そ、それでね当麻君！ 私のお弁当、食べてくれるかな？／＼／」

「俺？ いいのか」

「うん、ぜひ！」

高町さんはどうやら当麻に食べてもらいたいみたいだ。

さっきの話を聞いて同情したのかな？

じゃ無かったらうらやましい。

「じゃあ私も当麻君にお弁当作ってくる！」

なに！平沢さんにも作ってもらえるだと！

二人の女子からお弁当作ってもらえるなんて・・・なんて妬ましい。

「いや、あんたも作ってもらえるんとちゃうの？」

何言ってるんだ鬼塚さん。姫路さんは僕の食生活を心配して言うてくれたんだ

「ハア・・・もうええわ」

「さて、話がそれたな。試召戦争に戻ろう」

おお、そういえばそうだった。

「雄二、ひとつ気になったんじゃがどうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろっし、勝負に出るならAクラスじゃろっし？」

それは僕も気になっていたところだ。

「そういえばそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

雄二が何も考えないで戦争を仕掛けるなんてありえないと思う。

「どんな考えですか？」

「いろいろと理由はあるんだが、Eクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「えっ！？でも僕らよりもクラスが上だよ」

当然僕らよりも点数が高く、戦力も強いのに。  
雄二の言い分だと、自分たちが勝って当たり前前という感じに聞こえる。

「明久。お前の周りにいるメンバーを見てみる」

「えーっと……………」

周りのメンバーを見ながら考える。

「美少女が四人と馬鹿が二人とムツツリが一人に不幸が一人とツツ  
コミが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「……………(ポツ)」

「アキッたらもう、正直ね」

「ええっ!？君たちが美少女に反応するの!？」

「どうせ上条さんは不幸ですよ……………」

「ツツコミってなんやねん! ちゅうか私は美少女の中に入ってへ  
んのか!」

「まあまあ、落ち着くんじゃ皆」

秀吉が皆をなだめてくれる。美少女と言ったら秀吉と姫路さんに高  
町さんと平沢さんに決まっているじゃないか。

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして説明を始める。

「姫路と高町に問題がないとしたら、Eクラスには勝てる。Aクラ  
スが目標な以上、Eクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「? それなら、Dクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ、確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからね。派手にやって今後の景気づけにしたいでしょ？」

「あ、なる程」

高町さんの説明で納得する

「そういうことだ。それに、さっき言いかけた妥当Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

なるほど、今後のことも考えているんだな。さすが雄二だこういう事を考えさせたら右に出るものはいない

「だが、それも少し難しくなった」

「え？ それ、どう言う事？」

「さっき言ってたよな、Dクラスの代表は藤崎だって」

「うん」

「あいつのことだ、俺の考えている事がばれてる可能性がある」

「ま、まさかそんなこと・・・」

「いや、あいつは俺がFクラスの代表だってことを知れば油断せず  
に調べてくるだろうからな」

「……あれ？ 確か、僕が出て行こうとしたらボツスンが……」

『お前らの所の代表って誰だ』

『雄二だけど……それがどうしたの？』

『……いや、そんだけだ』

「……………」ダラダラ

「どうした明久。汗なんか流して」

「じ、実は……ボツスンに雄二が代表だって教えちゃった……」

「くハア。まあ指示しなかった俺が悪い、気にするな」

雄二は額に手を当ててため息をついたが許してくれた。

「のう雄二よ、元々の作戦はどんなものだったんじゃ？」

「ああ、本来なら  
ガチャ」

「よゝ坂本、邪魔するぜい」

「　　　つと、土御門か」

秀吉が作戦を聞こうとした所に、土御門君が屋上にやってきた  
ん、手に何か持ってきている

「ねえ土御門君。それは何？」

「ん？　ああ、こいつはFクラスの連中の過去の成績表だ。  
ようは、俺たちの現在の戦力が書いてあるってことだ。  
・・・これでいいんだろう、坂本」

「ああ、見せてくれ」

そつに言つと雄二は成績表を真剣な顔で見ていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん。」

なあ土御門こいつはいつたい・・・」

「ん？・・・ああ、こいつはなあ  
とだぜい」

と、言つて

「ぶっ、なるほどな」

成績表を見ていた雄二が何か土御門君と、聞こえなかったけど、話していたら不適に笑った

「よし！ おまえら、早く教室に戻るぞ。 Dクラス戦のミーティングだ！」

「ちょ、ちょっと雄二、大丈夫なの？ 作戦が読まれているんじゃないの！？」

「大丈夫だ。 お前らが・・・いや、 Fクラス全員が俺に協力してくれたら勝てる。」

「いいか、お前ら。 ウチのクラスは 最強だ」

涼しい風がそよぐなか、僕たちは校舎に入っていた。

#### 第四問 戦線布告（後書き）

ちなみにこの文月学園には男子寮、女子寮があり。

上条さんはそこに住んでおります。

他の生徒も結構住んでいます。

もちろん、寮母や寮夫もいます。

次回からDクラス戦です。

いろいろ変えていく予定ですのでよろしく願います。



## 第五問 Dクラス戦 開幕（前書き）

あとがきに召還獣のステータスと独自設定を書きました。

### 第五問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希、フェルト・グレイス、白井黒子の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました。

刹那・F・セイエイの答え

「GN………粒子」

教師のコメント

小さくGNと書かれています。どついう意味でしょうか？

ティエリア・アーデの答え

「GUNDAM NUCLEUS PARTICIE（GN粒子）」

この粒子の正体は光子の亜種であり、相転移直前の位相欠陥を用い

て重粒子を蒸発させずに質量崩壊させると電子と共に放出される原初粒子である。

原初の粒子だけあって、状態によって多様な効果を発揮する。機体の推進力や姿勢制御に使われ、周囲に散布することによって電波通信やレーダー機器を妨害する効果を発揮し、圧縮して射出することでビーム兵器として火器にも転用可能。このビームは……

教師のコメント  
そうですね。

土屋康太の答え  
「寄せては返すの」

教師のコメント  
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え  
「勇者の武器」

教師のコメント  
先生もRPGは好きです

藤崎祐助の答え  
「ボツスンプレイド!!」

教師のコメント  
オリジナルの武器を作らないでください

## 第五問 Dクラス戦 開幕

Fクラス side

対Dクラス戦最前線

前線で戦っていた秀吉、唯、その他前線メンバーは苦戦していた

「くっ！あやつ、かなり手強いぞ！」

「ハッハー！お前たちなんてこのDクラスの鉄砲玉！ 田井中 律が相手だー！」

彼女の足元には、身長が80センチ程度で文月学園では無い制服を着たデフォルトされた田井中 律の姿をした召還獣がいた。持っているのはドラムで使うスティックでそれを自在に操りながら前線部隊に食い込んでいた。

「科学のテストはヤマが当たったからな、けっこう強えーぞ！」

《げ！来たー！》

「おら！くらえー！」

Dクラス 田井中律 VS Fクラス 近藤吉宗

科学 137点 VS 23点

相手の召還獣の懐に潜り込んだ律の召還獣は、持っているスティックで腹に連続で叩き込み、相手を戦死にさせた

《うわー！》

Dクラス 田井中律VS Fクラス 近藤吉宗  
科学 126点VS0点

「戦死者になつたものは補習！」

《うわー！助けてくれー！》

近藤は、どこかともなく現れた鉄人に連れ去られた。

「さあ！戦死になりたい奴は前に出てこーい！」

勢いはとまらず、どんどん突き進んでいく律。

その前に秀吉が立ちはだかる。

「これ以上進ませるわけにはいかん！試験サモン召還じゃ！」

「よっしゃー！次の相手はお前に決めたぜ！」

Fクラス 木下秀吉VS Dクラス 田井中律  
科学 78点VS126点

「おらおらおらおらあ！」

「ぐう！」

律の連続攻撃を、薙刀で受け止めたが点数の差で少しずつ押された始めている

「そりゃー！」ガキン！

「しまった！」

律の下から来た振り上げ攻撃に秀吉は対応しきれず、薙刀を上に乗せてしまい、懐をがら空きにしてしまった！

「とどめー！」

「ぬう、ここまでか……」

秀吉の召還獣にとどめをさすべく攻撃を叩き込む律の召還獣。そこに……

ギユイイイイイイン

「うわ！ な、なんだ!？」

急にやってきた音に吹き飛ばされる召還獣。

「だいじょうぶ？ 秀くん」

「たすかったぞい、平沢」

唯の足元には、律と同じタイプの制服を着て、ギターを構える召還獣がいた

「へへ、さっきの攻撃、唯の仕業か」

「うん、ごめんね、りっちゃん」

「いや、今は戦争中……たとえ友が相手だとしても、戦わなきゃならないのが定め……」



「これが、私の召還獣の特殊能力、“ビートアップ”！  
召還獣が音楽を弾くことで、私が選んだ召還獣のステータスをアッ  
プさせる能力だよ！」

「なんですと!?!」

「これは、ありがたいのじゃ！ ゆけえ！」

秀吉の召還獣が律の召還獣に突っ込む！

「な！ く！ くそ！」

Fクラス 木下秀吉&平沢唯 VS Dクラス 田井中律  
科学 78点&28点 VS 94点

さつきとは反対に押され始めている律の召還獣。

「りっちゃん、実はこんなことも出来るんだよ！

・・・くらえー“スタンビート”!!」

ギュギュイイイイイイン

「な!う、動かなくなった!?!」

唯の召還獣が律の召還獣に向けて音をぶつけると律の召還獣が動か  
なくなつた

「今だよ秀くん!止められるのは5秒くらいだから!」

「承知した！」

ジャンプした召還獣が止めの一撃を繰り出した

ガキン！

「な!？」

「た、助かった〜 サンキューキャプテン」

「まったく・・・後先考えずに突っ込むからこうなるのよ。田井中さん」

そこにはキャプテンこと高橋 千秋が駆けつけており、秀吉の召還獣の攻撃を受け止めていた。

Fクラス 木下秀吉&平沢唯 VSDクラス 田井中律&高橋千秋  
科学 78点&28点 VS 83点&149点

「さあ、私が来たからにはここを突破させてもらっわよ！」

そう言ってキャプテンの足元の、短パンを穿き、赤いユニフォームを着た召還獣は金属バットを構えた。

「まずは、あなた達からね！」

「くっ！」



プシューウウウ

「な、なんじゃとー!」

秀吉の召還獣が纏っていた光が消滅した!

「どつやら、1分ぐらいが限界のようだね」

「ぬう、平沢!さっきのをもう一回頼むのじゃ!」

「う、うん!」

さっきのと同じ曲を弾こうとすると

「隙ありだ!」

「きゃあ!」

Fクラス 平沢唯 VSDクラス 田井中律

科学 12点 VS 83点

「悪いけどパワーアップなんてさせないわよ」

「仕方が無い・・・皆のもの、退くのじゃ! 退いて体制を立て直すのじゃ!」

「みんな、そのまま追撃して、一人でも減らしていくのよ!

田井中さんは一旦補給に行ってきて」

《《《おおおおお!》》》

「わかった！」

明久 side

Fクラス中堅部隊

「吉井！木下たちがDクラスの連中と、渡り廊下で交戦状態に入っ  
たわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは、同じ部隊に配属され  
た島田さん。こうして改めて見ると背は高く、脚もきれいなのに、  
どこか女性としての魅力に欠ける。  
いったい何が足りないんだろう？

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部きれいに」  
マズイ。何かスイッチが入ったみたいだ。

「それよりホラ、今は試召換戦争に集中しないと！」

島田さんから目をそらす為にも、試召換戦争に集中する。まずは、  
状況を確認しないと……

『さあ、来い！この負け犬が』

『て、鉄人！？い、嫌や！ 補習室には行きとうない！！』

『黙れ！戦死した捕虜は補習室で特別授業だ！』

『み、見逃してくれ。あんな拷問に、耐えられる気がしないねん』

『拷問？違うな。あれは立派な教育だ。授業が終わるころには、趣味が勉強で尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒にしてやるっ。』

それとお前のピアスは補習の間外さしてもらっ』

『そ、そんな！ そないなことしたら僕は、青い髪の関西弁を喋るただの男子生徒になってまっやん！』

『それがどうした。補習が終わるころにはピアスを付けない、模範的な生徒に仕立て上げてやるから覚悟しろ！』

『お、鬼や！誰か、助けっ  
ン、ガシャン(』

イヤアアああ

(バタ

なるほど。これが戦争というものか。僕は少し甘く見ていたのかも  
しれない。

「美波、中堅部隊の全員に通達！」

「ん？何か作戦でもあるの？」

「総員退避と」

「この意気地なし！」ドス！

「ぬおおおお！め、目があー！ー！ー！！！」

「目を覚ましなさい、このバカ。アンタは部隊長でしょ！臆病風に吹かれてどうするのよー！」

その覚ますべき目に激痛がああ！

そういうことはせめて、グーかパーで殴った後に言ってよ！

「いい、吉井！ウチらの役割は木下たち前線部隊の援護でしょう？ウチらが逃げ出したら、アイツらが補給できないじゃない」

確かにそうだ。僕たちには、大事な役割があつたんだ。秀吉のためなら、多少の犠牲ぐらい……。。

「その通りだね島田さん。僕がまちがっ

《報告します前線部隊が後退を始めました》

「総員退避よ！」

さっきと言っていることが全然違う！

「アキ、総員退避で問題ないわね？」

「うん、そうだね。僕らはよく頑張ったよね」

これは逃げるんじゃないわね、戦略的撤退なんだからね

「待たんかいボケエ！」

振り返った先には本陣に配置されているはずの鬼塚さんがいた。

「ど、どうしたの鬼塚さん？」

「代表から伝言や・・・『逃げたらクロス』」

な、雄二やつ僕達が逃げることに感ずいていたのか！

「まあ、どの道ここから逃げるようやったら私がシバき倒し  
て  
」  
「全員突撃しろお　っ！！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュしていた。それもこれも  
Fクラスの勝利を思つてのこと。

別に鬼塚さんがいつの間にか持つていたホツケースティックにビビ  
ツたとか、そういうんじゃないんだからね！

と、前方からこちらに向かって走ってくる美少女二人を発見。

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

「たすかったよっしー！」

「秀吉に平沢さん、大丈夫？」

「うむ、戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところま  
で削られてしまったわい」

「私もあぶないよっ」

「そっか。じゃあ予定通り戻ってテストを受けてこないと」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二  
教科でも受けてくるとしよう」

言うや否や、秀吉は教室に向かって走って行った。

その後ろに前線部隊に配置されていたクラスメイトが向かう

「吉井！敵がもう来たわよ！」

なに！もうここまで来たのか！

《次の相手はあなた達みたいね。試獣召還！》<sup>サモン</sup>

Dクラス 玉野美紀

科学 124点

「あたしが受けたつたる。Fクラス、鬼塚一愛。試獣召還！」<sup>サモン</sup>  
《同じく、藤堂。試獣召還！》<sup>サモン</sup>

Fクラス 鬼塚一愛&藤堂VS Dクラス 玉野美紀

科学 67点&53点VS124点

鬼塚さんも戦闘に入ったみたいだ。

今は科学のフィールドか・・・

「島田さん。科学に自身は？」

「全くなし。60点台常連よ」

うーん、さすがはFクラス。おせじにもいい点数だとはいえない。

「あっ！ そこにいるのはもしや・・・」

「うっ！ こゝこの声は・・・」

くそ！ どうやら島田さんが敵に目を付けられたみたいだ！

「やはり！ 美波お姉さま！」

「み、美春・・・！」

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先に急ぐよ！」

「ちよっ・・・！！ 普通逆じゃない！ 『ここは僕に任せて先を急げ！』じゃないの！？」

「そんな台詞、現実じゃ通用しない！」

「よ、吉井！ このゲス野郎！」

「お姉さま！ 逃がしません！」

「くっ、美春！ やるしかないってことね・・・！！」

「「試獣召還つ（サモン）！」

Fクラス 島田美波VS Dクラス 清水美春

科学 53点VS94点

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋いちにちせんじゅうの想いで待っていました………」

「ちょっと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

いよいよ戦闘が始まる。そう思うと、自分のことじゃないのに全身に震えが走る。

「ところで島田さん、お姉さまって」

「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

「このわからずや！」

………なんだか、島田さんが遠い。

「行きます、お姉さま！」

二人の召還獣の距離が詰まる。

「はあああっ！」

「やあああっ！」

それぞれの召還獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「じっ………のっ！」

「負けません！」



「島田さん！向こうのが点数が高いんだから、真正面からぶつかつた不利だ！」

「そんなこと言われなくてもわかってるんだけど、細かい操作はできないのよ！」

直後、力の均衡が崩れる。島田さんの召還獣がサーベルを取り落とした！

「ここまでですっ！」

「くうっ！」

そのままの勢いで島田さんの召還獣の喉元に剣を突きつけられる！

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

島田さんが取り乱す。そうだね。補習室は僕も嫌だ。

「補習室？・・・フフツ」

楽しそうに笑いながら、清水さんが島田さんの手を引っ張る。

あれ？清水さん、そっちにあるのは保険室だよ？

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベットは空いていますからね」

「よ、吉井、早くフォローを！ なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

そうだろうね。僕から見てもそんな気がするよ。でも・・・

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔するものは、全員殺します……。」

ごめん、僕にソコに飛び込む勇氣は無い。

「島田さん、君の事は忘れない！」

「ああっ！吉井！なんで戦う前から別れの言葉を！？」  
「邪魔者は殺します！」

ああ！こっちにやって来た！ヤバイって！

「 試獣召還っ（サモン）」

ガキンッ！

割り込んできた声と共に一体の召還獣が清水さんの剣を受け止めた。

「大丈夫かい吉井君！」

「きみは、スザク君！」

僕を助けてくれたスザク君！ 君が救世主のように見えるよ！

「くっ！ 美春とお姉さまの邪魔をしないでください！」

いったん距離をとった清水さんの召還獣がふたたび構えをとった。

「悪いけど、今度は僕の相手をしてもらおうか」

そう言つてスザクくんの召還獣も構えを取つた。

スザク君の召還獣は全身に白と金の装甲を纏つていて白いカブトを付けていた。

武器は刀身が赤い二本の剣に腰のほうにマウントされている青い銃が1つ。

僕と同じ観察処分者なのに豪華な装備だ。

「いくぞ！」

すると召還獣のカカトから後ろに伸びているホイールが回転して高速で動き出した。

どうやらスザク君の召還獣は高速機動型の召還獣みたいだ。

「死になさい！」

清水さんの召還獣が突っ込んできた。

スザク君の点数は？

Fクラス 枢木スザクVS Dクラス 清水美春  
科学 23点VS94点

低つく！！

まだ僕のほうが点数高いよ！？

これじゃあすぐ返り討ちに・・・

ズバア！

「なっ！」

Fクラス 枢木スザクVS Dクラス 清水美春  
科学 23点VS87点

あれ！？清水さんの方が点数が減っている。

「くっ！こ、この！」

清水さんが今度は連続で切りかかってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そこっ！」

ズバツズバツ！！

Fクラス 枢木スザクVS Dクラス 清水美春  
科学 23点VS71点

「な、なんで・・・！？」

す、すごい！ 清水さんの攻撃を見切るだけでなく受け流し、攻撃の隙が出来たらカウンターを決める！ 召還獣を完璧に操作しないと出来ない事だ。

召還獣の操作に自身ある僕でもミスするかもしれないことを簡単にやっつのけるなんて・・・

「な、なんで当たらないの！」

冷静さを失った清水さんの攻撃がどんどん大振りになってきた。

「甘い！」

ギン！ ジャリン バキツ！！

大振りの攻撃を片方の剣で受け流し、その勢いで体を回転、そのまま回転蹴りを叩き込んだ。

「そ、そんな・・・」

Fクラス 枢木スザクVS Dクラス 清水美春  
科学 23点VS47点

「これで止めた・・・！」

清水さんの召還獣は蹴り飛ばされた勢いで壁に激突して動けない。スザク君の召還獣は腰から銃をはずし構える。

「ヴァリス、バーストモード」

そう言うと、銃身が伸る。

狙いを清水さんの召喚獣に定め、引き金を引いた。

ドガン！

よし！当たった、これで清水さんを倒した。

「助かったよ、スザク君」

「どういたしまして」

煙が晴れる……ッ!?

「い、いない!？」

「これは……」

煙が晴れても、そこには清水さんの召還獣の姿が無かった。戦死したなら鉄人が来るはずだけど……来ない。

「こちらですの」 「ビュ!」

「ッ!」 キンッ!

い、いきなり廊下の奥のほうから矢みたいなのが飛んできたッ! とっさにスザク君が弾いてくれたけど……敵の増援!?

「……君は？」

「わたくしはDクラスの白井黒子と申します。以後、お見知りおきを」

奥から出てきたのはツインテールの女子……白井さんって言うていたな。

「なるほど、増援か……」

「いえ、わたくしは助太刀に参りましたの……その清水さんに」

「美春に、ですか？」

「ええ、あなたの思いに、わたくしは大きな共感を覚えましたの」

「共感、ですか・・・？」

「ええ、わたくしにも、お姉さまとお呼びする御方おります。それはもう愛していますとも！」

そしていつかはお姉さまとベットで、あ〜んなことや、こ〜んなことまでグヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

Aクラス

ゾクゾクゾク！

「うひいっ！？」

「ん？ どうしたの、美坂さん？」

「あ、ああ、な、なに工藤さん？」

「いや、急に震えだすから・・・大丈夫？」

「うん、なんか急に寒気が・・・」

「う〜ん、やっぱり春とはいえエアコンを付けたのは不味かったか

な」

「だ、大丈夫よ、これくらい。もう寒気も直ったし」

「そお？ じゃあ何かあったらいつてね？」

「うん、ありがとう」

「とにかく、わたくしはあなたの事を応援したいのです」

「ありがとう白井さん・・・美春は、とてもうれしいです！」

「そうです！ わたくしたちは同志！ 愛するお姉さまは違えど、想う気持ちは同じ！・・・さあ、行きましよう、あの者たちを倒し、あなたはあなたのお姉さまと共にアヴァロン（保険室）に  
「！」

「はい！」

「ちょっと！ ウチは嫌だって言っているでしょ！」

ま、まずい。ここで清水さんと二人がかりでこられると・・・

「そういえば。清水さんの召還獣は・・・？」

「ここに、居りますわよ」「シユン！」



すると白井さんの召還獣が清水さんの召還獣といっしょに出てきた。  
なんで清水さんの召還獣もいっしょに……？

「なるほど……そういうことか……！」

「え！？ 何か分かったのスザク君！」

「彼女……白井さんの点数と召喚獣を良く見るんだ」

えっと、白井さんの点数は……

Dクラス 白井黒子

科学 412点

4、400点オーバーッ！！

Dクラスにそんな人がいるなんて……

そして召還獣の腕に青い腕輪が付いているってことは……

「う、腕輪持ちィ！」

「そういうこと。これは、かなりまずい状況だね。」

「スザク君、そんなのんきな」ことを言っていられませんわよ」ッ

「！」

ヒュン！

「ッ！！」バツ！

いきなり白井さんの召還獣がスザク君の頭上に現れると、それに反

応じたスザク君が召喚獣をバックジャンプで下がらせた。

「・・・あれが白井さんの召喚獣の能力!？」

「ええ、そうです。わたくしの腕輪の能力は瞬間移動。テレポート自分と自分の触れたものをフィールド内ならどこでも飛ばすことが出来る能力ですわ」

「なるほど、その能力で僕のとどめの一撃から、その召喚獣を助けたのか」

「その通りです。さあ、お喋りはここまで! 一気に倒しますわよ、美春さん!」

「ええ、行きましょう、黒子!」

「愛すべき人は!」

「お姉さま!」

「殿方はすべて!」

「豚野郎!」

「邪魔をする」「奴らは」

「「ぶつ殺す!」!」

「くっ! 試獣召還っ(サモン)!」

苦し紛れに僕も召喚獣を召還するが……

「ど、どうするスザク君」

「撤退しようにも、フィールドを出ようとすると白井さんの召還獣が先回りして来るだろう。」

それにこの点数差だ、1撃でもくらえばやられる。」

「じゃあ、さっきの銃で攻撃すれば……」

「だめだ、ヴァリスで攻撃しても簡単に避けられる。それにヴァリス

による攻撃は点数を消費するんだけど……今の僕にそんな余裕は、無い」

Fクラス 枢木スザク

科学 8点

本当だ！ 点数がまずいことに！

「じゃあ……この状況、どうすればいいの!?!」

「増援が来るのを……待つしか、無い……!」

こ、この状況で増援が来るのを待つ……

Fクラス 吉井明久&枢木スザク VS Dクラス 白井黒子&清水

美春

科学

4 2点&8点VS 4 1 2点&4 7点

「無理〜〜!」

「無理でも何でも、やらなければ、僕たちは補習室行きだ・・・」

「それも嫌だ〜〜!」

「そしてここで白井さんを抑えなければ、おそらく中堅部隊は壊滅する・・・」

「それもまずい!」

「それに、島田さんも助けられない」

「それはどうでもいい」

「ちよつと!吉井!」

そうだ、白井さんを抑えなければ中堅部隊に倒せる人はいない!

島田さんは・・・どうでもいいとして「ちよつと!」僕たちが抑えなきゃいけないんだ!!

・・・といつても、だれか早く助けに来て〜〜!!

## 第五問 Dクラス戦 開幕（後書き）

ここでこの回に出てきた主な召還獣と独自設定を紹介します  
少し長いですが……

Fクラス

吉井明久

服装 学ラン

武器 木刀

攻撃 通常近距離型

移動 通常型

特殊能力 物理干涉

腕輪 なし

島田美波

服装 軍服

武器 サーベル

攻撃 通常近距離型

移動 通常型

特殊能力 無し

腕輪 なし

木下秀吉

服装 着物に袴  
武器 薙刀  
攻撃 通常近距離型  
移動 通常型  
特殊能力 無し  
腕輪 なし

平沢唯

服装 桜が丘高校の制服  
武器 ギター（愛称 ミニギター）  
攻撃 特殊中距離型  
移動 通常型  
特殊能力 ビートアップ ギターの演奏することで指定した召還獣の能力を変化させる。演奏する曲によって効果が違う、動きを止める“スタンビート”などもこの能力から派生したものである。  
曲は唯が曲を覚えることで増えていく。  
腕輪 なし

鬼塚一愛

服装 開盟学園の制服  
武器 フィールドホッケーのスティック（愛称 サイクロン）  
攻撃 通常近距離型  
移動 通常型  
特殊能力 無し  
腕輪 なし

## 枢木スザク

服装 パイロットスーツの所々にランスロットの武装、頭にランスロットの頭を模した兜

武器 MSV×2 ヴァリス スラッシュハーケン×4

攻撃 通常近距離、特殊遠距離型

移動 ランドスビナー 高機動型

特殊能力 物理干渉、換装 点数を消費することによってコンクエスターに換装することができる。

腕輪 なし

## Dクラス

### 田井中律

服装 桜が丘高校の制服

武器 ドラムのスティック

攻撃 通常近距離型

移動 通常型

特殊能力 なし

腕輪 なし

### 高橋千秋 キャプテン

服装 ソフトボール部のユニホーム

武器 金属バット

攻撃 通常近距離型

移動 通常型  
特殊能力 なし  
腕輪 なし

白井黒子

服装 常盤台中学の制服

武器 学生靴（中に鉄板入り） スカートに忍ばせた鉄矢

攻撃 通常近、中距離型

移動 通常型

特殊能力 なし

腕輪 テレポルト瞬間移動

消費点数 なし

召還獣と召還獣が自分の触れたものをフィールド内ならどこでも飛ばすことが出来る

独自設定

移動タイプ・二年次に召還獣を始めて召還したとき、三タイプある内から決まる。 足で移動する“通常型”の他に、足以外の方法で移動する“高機動型”、空中に浮遊しながら移動する“飛行型”があり、限界高度は170センチくらいまでである。

攻撃タイプ・移動タイプと同じように、二年次に召還獣を始めて召還したときに決まる。 種類は二種類に近、中、遠距離応じて三種類の計六つある。

剣や実弾みたいな実態がある攻撃を“通常型”。  
エネルギーや音波みたいな実態の無い攻撃を“特殊型”。 特殊型



の攻撃は、威力がでかいが、その変わり点数を消費する。（平沢唯の攻撃も特殊型だが、威力がない為、点数消費がない）

特殊能力・上二つと同じように二年次に召還獣を始めて召還したときに、稀な確立で召還獣が習得している能力である。

腕輪ほど強力ではないが、点数に関係なく発現するので、点数が低くても戦い方しだいでは、高得点者を倒すことが出来る。

腕輪・ここでの腕輪は五種類ある。それぞれ、赤、青、緑、金、黒がある。

赤・・・攻撃型  
青・・・移動型  
緑・・・強化型  
金・・・???  
黒・・・???

金と黒に関しては後々説明します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8538w/>

---

バカとテストと召還獣 文月学園試召戦争黙示録

2011年11月15日21時30分発行